

---

# 僕のマシン

新品の靴

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

僕のマシン

### 【コード】

N9898N

### 【作者名】

新品の靴

### 【あらすじ】

朝起きて窓を見ると、空がなくなっていた。

## はじまりの丘

朝起きて窓を見ると、空がなくなっていた。

どうして空がなくなっただろう・・・

ふだんは全く意識していなかったのに、この心細さは何なのだろう。空を心地よさそうにたゆたう雲も、季節のにおいを届けてくれる風もない。

あるのはがらんとした寂しさだけ。

ごおおおんという音がする。

ごおおおんごおおおんごおおおん

原因はあいつか。

見ると小高い丘の上で少年が掃除機で空を吸っているではないか。

もう少しで空の端まで吸い込まれそうだ・・・

少年は必死で掃除機を振り上げ、ありつただけの憎しみをその視線にのせて消えゆく空を見上げる。

薄っぺらい紙のように掃除機はどんどん空を吸いこんでいき、しゅぽっという音で最期の空が吸い込まれた。

少年は声たかだかに宣言する。

僕の勝ちだ・・・！

これで少年は本当のひとりぼっち。  
最後まで見守っていた空も消えてしまった。

私は走った。

少年のために。

消えてしまった空のために。

走って走って走ってやっと丘が見えてきた。

少年は掃除機を手にして固まったままだ。

少年の傍へゆっくりと歩いていく

「どうして、どうしてそんなに空を憎むの？」

私は少年に問う。

「あんなものがあつたから・・・」

「空が君に何をしたの？」

軽い沈黙

「雨だよ。」

本当にささやかな声でそう呟いた

「雨？」

「そう、雨。雨が降ってきたんだ。遊んでいるときに。」

「それで？」

掃除機を持つ手に血管が浮き出る

「それで？それで僕のマシンが壊れたんだよ。」

声がふるえてる・・・

「マシン？」

「そう、僕のマシン。父さんが僕にくれたたった一つのプレゼント。」

父さんの設計したマシン。僕のたった一人の友達。」

「マシンって・・・機械でしょ？」

「そうだよ。機械。でもね、父さんがくれたマシンは他のとは違ってたんだ。」

「違った？」

「そう、違った。些細な違いだけれど決定的な違いだった……。」

「なんなの？その違いって？」

「自我だよ。」

少年は私の目をまっすぐに見つめて言う。

からかつてるんじゃない。本気で言ってるんだ。

少年の瞳はそう告げていた。

「自我……。」

「だから友達でもあったんだ……。でも、でももういないんだ。

彼はどこかへ行ってしまった……。もう二度と帰ってこない。抜け殻だけを残して。雨に濡れた日からね。」

「抜け殻だけって……。」

「戻ったんだよ。もとのマシンに。ただの機械に。ただの製品に。あんな奇跡はもう二度と起こらない。」

修理……しようよ

「あのさ、聞いてなかった？あんな奇跡二度と起こらないって……。」

「わかんないじゃん！どうしてそんな簡単にあきらめるの！？たった一人の大切な友達なんでしょう？空に復讐なんてしてないで、さっさといい修理屋探そうよ……！」

あまりにも口調がきつすぎせいか少年は半泣きで答える

「でも……でももうだめだよ……空吸い込んだじゃったし……  
そんないい修理屋なんて見つからないよ……。」

「大丈夫だつて」

何の根拠もなく私はそう叫ぶ。

「大丈夫。大丈夫だから。いい修理屋探して、見つけて、掃除機から空取り出してもらつて、君のマシンを治して、それですべて終わり！」

「空よりも僕のマシンのほうが先・・・」

「うるさい！あんただんだけ迷惑かけてると思つてんの！」

はあ・・・としょんぼりする少年

「まあ・・・でも、ね？もし、もし全部上手くいったらさ、みんなで夕日見ようよ」

「夕日？」

「そう、夕日。私夕日が好きなの。私と、君と、君の友達のマシンとで。三人で夕日みようよ！」

「あ・・・うん。」

「・・・？どうしたの？顔が赤いよ？」

「いや・・・僕と一緒に見てくれるんだね。」

「当たり前じゃん・・・友達なんだし。」

「・・・ありがとう。」

「それじゃ行こう！」

「今から！？」

「あたりまえです。」

しゅっぱーっ

「ちよ・・・ちよつと待つて」

「何よ？」

「あ・・・のさ、僕のマシンの話。信じてくれてありがとね」

「まだ半信半疑だけど、君がそういうなら信じる。君は空を吸い込

んじやうよづなやつだけど、ほんとはいい色持つてるから。」

「色？」

「そう、色。なんとなくだけど私は相手の色が見えるの。」

「君・・・変わってるんだね」

「君に言われたくないです。」

こうして、私と少年の旅が始まった。

「どこにいくの？」

「うーん・・・その、君のマシンを君にあげた人のところへまず行くべきだと思う・・・。」

「僕の父さんの所!？」

「そうなるね。」

「でも・・・でもずっと仕事で家にいないんだよ？」

「なら仕事場へ出向こう」

「ええ!?!・・・いや、それは・・・そんなの怒られるし・・・」

「でもそれしか今は選択肢ないでしょ？」

「そうだけど・・・」

「君の友達のためだつて」

まだぶつぶついていたが、しばらくするとよづやく腹を括ったらしい。

「わかった。案内するよ」

続く

## 高層ビルで（前書き）

私と少年はマシンの設計者の元へ行くことにした。

## 高層ビルで

遙か頭上にビルの尖塔が見える

「君のお父さんって、すごい人なんだね・・・」  
ふんつと鼻を鳴らして答える

「あたりまえじゃないか。僕の父さんなんだから。」  
「・・・要するに自分もすごいんですねわかります。」

「・・・この子は我が強いようだ。  
ただそのせいで寂しい思いもしてきたんじゃないだろうか、  
とか思ったり。」

ビルに入り受付の人に事情を話す。

少々お待ちください。

そう言っでどこかしらに電話をかける。

たぶんお父さんの秘書だろう。

「アポは取っていますか？」

「すみません。取っていません・・・。が、とても急な話なんです。  
特にこの子と空が無くなったことに関して。」

あらかじめそのことは少年と話し合っで決めていた。

空を吸い込んだこと対して、さすがに親には報告しておくべきだ。  
そう言っで少年はまた半泣きになりながら渋ったが、自分の犯した  
罪は罪だ。どんな理由があろうと。いけないことをしたら親にちゃ  
んと言わないといけない。

・・・それに今回はそれが武器になることも分かってた。

「……わかりました。少々お待ちください。」

だいが長々と話しこんでいたが、ようやく結論に至ったらしい。受話器を置いてこちらを向く。

「今日のお昼12時から30分間だけ、お時間を割いて頂くようです。」

「わかりました。ありがとうございます。では12時少し前にここにまた来ます。」

今は11時。

そういえば私達は朝から何も食べていない。

お腹へったね。

少年は疲れた顔で私を見上げる

「どこかのカフェに行つて、お昼ご飯食べようか」

オフィス街の一角にあるスタバに入つて腰を下ろす。

「でもさ、無事に父さんの所まで行きつけたとして、そこからどうするの?」

「うーん……その前に聞きたいんだけど、君のマシンに自我があつた、っていうのは君のお父さんは知っているの?」

「僕は言つたよもちろん。けど、信じてはくれないと思う。あの父さんのことだし……。」

声の音量とともにだんだんと俯いていく

「君のお父さんつて、厳しい人なの?」

「そりゃもう。だいたい世界に名だたる大企業の社長だよ?厳しいに決まつてるじゃないか。」

そうですかすごいんですね

「・・・そ、そうなんだ。でも信じてくれてないのはまずいなあ・・・」  
「どうして？」

「だって私達に必要なのは単なる修理屋じゃなくて、ちゃんと自我を取り戻してくれる修理屋よ？お父さんに聞けば紹介してくれると思っただけれど・・・、肝心のお父さんが信じてなかったら紹介もなにもないよね。」

「・・・」

「もし、もし何も変わらなかったら？そこで詰んだら？」

「その時はその時に考える。」

それに私はそうはならないと思う。

子は親に似るって言うし。

可能性は無くはない

「あああとさ、君のことなんて呼んだらいいの？」

「僕？僕は別にいままで通り君でいいよ。名前は嫌いだし。お姉ちゃんこそなんて呼んだらいいの？」

お姉ちゃんか・・・

くすぐつたいような新鮮な感覚が体を走る

私は一人っ子だったから、お姉ちゃんと呼ばれるなんて想像だにしていなかった。

「私もお姉ちゃんのままでもいいよ。」  
年の離れた姉弟だな、と思った。

何笑ってんのさ？ と少年は不思議そうに私を見つめる

さあ、

時間だ。

受付の方に案内されてエレベーターを乗り継いでゆく

「たっか・・・」

啞然とする私を尻目に、少年は景色など眼中になく、ずっとそわそ

わしている。

「ちよつと！落ち着きなさいよ。」

「だって、久々に父さんに会うんだし、空のことだって・・・」  
受付の人がやたらとチラチラこちらを盗み見てくる。

やはり空の件については大きな事件となっているのだろう

チン

と音がしてエレベーターの扉が開く。

ゆっくりと目の前に広がっていく景色は、まさに勝ち組というものを表していた。

温かみを感じさせる照明に、ふかふかの絨毯。人が通るには広すぎる廊下にはなんと小川がゆるやかに流れており、川のせせらぎが地上遥か数百メートルで音を奏でる。

もうここに住んでもいいや

私はせこくもそう思ってしまった。

「ここからは秘書が案内しますので、失礼いたします。」  
入れ替わり立ち替わりで、秘書がやってきた。

おお、やはり秘書というものは美人さんなのね。

そういえば誰かが、秘書をイメージする時って、必ず美人をイメージしちゃうよね

とか言ってたのをおぼろげに思い出す。

「こちらへどうぞ」

と言って秘書はながあーい廊下を歩いてゆく。

「ねえ、君って秘書さんとは仲悪いの？」

小声でそう聞いてみる。社長の息子を見ても何の反応もない秘書に疑問を持ったからだ。

「父さんの秘書って何人もいるから全員は知らないよ。ただ一人良

く知ってるひとはいるけどね。」

そうですか。もうなんだかお父さんすごいひとなんですね。

「社長はこちらでお待ちしております。」

社長室。

扉越しに、いや扉でさえなにか近寄りがたい雰囲気を感じる。

ゴクリ

私と少年は互いに目で励まし合った

ここからが正念場だ。

「失礼します。」

ああ。

これが少年の父であり大企業の社長という方が。

眼光が鋭く、油断すると流れをすべて持っていかれそうだった。

そして、

そして、とても、蒼かった。

眩しいほどに蒼を発していた。

私にしか見えない色。

私はある確信をした。

「さて、」

彼は少年には一瞥もくれずに私を見据えて言う。

「残念ながら私はとても忙しい。時間が少ないので何の用があった私に直に会いに来たのか簡潔に言って欲しい。」

血筋(前書き)

はなしあい

## 血筋

「まず、」

口が乾いて上手く声を出せない

「まず、空の件についてです。空を吸い込んだのは、この子なんです。」

彼は手を机に載せて組んだまま、初めて少年を見た  
いや、睨んだと言ったほうが遥かに適切だろう。

「お前がか・・・？本当にお前がやったのか。」

「はい・・・。」

「はっ。お前にそんな勇気があったとはな。情けない。どれだけ迷惑をかけたかと思っているんだ。毎日の希望をお前は根こそぎ奪っていったんだぞ。」

語気を荒げて発せられる言葉に、ぐっと小さな拳を握りしめて必死で耐える

助け舟をだすか。

「せめて理由を、聞いてあげてください。」

「理由を聞いたところでなんにもならん。取り返しのつかないことをしてしまっただ。」

「ぼ・・・ぼくは、」

かほそく震える声が広い部屋に拡がって

「父さんのくれたマシンが、雨で、壊れちゃって・・・それで・・・空が憎くって憎くって、」

その声は、彼に届くか届かないかの声だったのに。  
父を想う気持ちはしっかりと届いた。

「ばかめ・・・あんなマシンいくらでもやるのに・・・。」

初めて彼は目線を下げた。彼なりに思うところがあるのだろう。多少なりとも自分にも責任があったことに気づいたのかもしれない。

沈黙が私達と彼との間を埋めていく。

「この子のマシンは、機能としては正常なんです。」

「……どうということだ？壊れたと聞いたが。」

「この子があなたに話したと思うんですが、雨のせいでそのマシンが失ったものは、自我なんです。」

「……。確かにその話は覚えている。だが……」

「お前はちよつと外へ出ていなさい。」

「どうやら1対1になりそうだ。」

私は少年に目で出ていくよう合図すると、軽く憤慨したようにため息を小さくついて出ていった。

「君は、まず何者だね？あの子とどういった関係か教えて欲しい。」

それに君はあの子の話を信じているのか？」

「私は、ただの、目撃者ですよ。彼が空を吸い込んでいた時の。そりゃあもうすごい表情でしたよあの子。まるで大切な人を失ったかのような。」

「大切な人？」

「そう。ただの機械が壊れても、あそこまではならないですよ。」

「だから自我がある？」

「自我、かもしれませぬ。少なくともあの子にとって自我と呼べるほどのものなんですよ。」

「君は知らないかも知れないが、あの子は少々変わっててね。小さい時から一人でおもちゃで遊んでいることが多かったんだよ。だから今回も、私のマシンに思い入れが深かっただけなんだろう。だから壊れてもいないんだよたぶん。初めから自我は無かった。あの子が勝手に生み出したものなんだ。それで雨の日を境に無意識がその存在を消したんだろう。成長して現実を見るようになってきただけなんだ。」

「と、思いたいんでしょう？」

「何を言いたい。」

「あなたも、昔、そう、あの子くらの時、出会ったんでしょう？自我ってやつに。だけど周りの誰も理解してくれなかった。だから最後は自分まで騙すようになった。」

「知った風な口をきくな。あれは事実私の幻想だったんだ。……それになぜそのことを知っている？」

「子は親に似るっていいですからね。言ってみただけですよ。しかしやはりそうでしたか。出会ってましたか。不思議な一族ですね。」

「ああ。それは認めよう。ある時期にさしかかると幻想が見える不思議な一族だな。」

「もう認めましょうよ。本当に、自我というものがヒト以外にも宿ったんだって。幻想なんかじゃないって。あなたが一番そのことを良く知ってるはずですよ。あなたは自分自身を騙すことによって、その存在を無かったことにした。だけど心の奥底ではわかってた。ちやんと存在したって。だからあなたはその日から決して満ちることのない虚しさと飢えに満ちた人生を送ることになった。皮肉なことに、そのおかげでこの会社が大きくなったんですよね？」

ああ、あとすこしで。

彼の蒼の輝きがどんどん強くなっていつてる。

もうすこしで、錆をきれいに剥がせるんだ

「……じゃあ逆に聞くが、君はどうしてそこまであの子の言葉を信じているんだ？ただの目撃者なのにな。そもそもただ見かけたという理由だけでここまであの子に付き添うのは納得がいかないんだが。」

その、質問は覚悟してた。

どうして私はここまでするのか。

「私は、

自我（前書き）

私の正体。

## 自我

マシンなんです。私は。

私の心臓はモーターです。

私の胸の音を聞いてみて。

ういーんと鳴っているのが聞こえるでしょう？

だけど私には自我がある。

あなたが今まで否定してきた自我が、マシンである私に宿っているんです。

誰が私を創ったのかはわからない。いろいろな記憶があるけれど、それは私が目覚める前にインストールされたものなんでしょう。

ただ、目が覚めて窓を見ると、空というものが無くなって、あの子がいた。

それだけです。

彼はしばらく、いやかなりの間黙っていた。

だけど私には分かった。

彼が、彼として戻ってきたということに。

だって蒼いんだもの。

透き通るようできて深みを帯びた蒼を、彼全体から発している。

「私は、あなたと、あの子を救いたい。もしかしたらそのためにも生まれてきたのかもしれない。そして、修理屋を探し出して、あの子のマシンを治してもらおう。それに・・・もし、もしそれができるなら、その修理屋は、私を創った人だから。私は、私を創った人に、あってみたい。」

「だからあの子と一緒にいて、自我というものを信じてるんです。」

彼は、ため息をついた。

それはそれは大きなため息だった。

まるでいままでの見えない重荷を吐き出しているようだった。

「やれやれだよ。本当に。やれやれだ。」

ネクタイを緩めながらビル群が見える広い窓へ向かう。

「君の話は、到底信じ難い。」

「でも、信じてる。」

「ああ、信じるよ。信じる。しかし、まさか君がマシンだとはね。

あの子は気づいてるのか？」

こちらを見るその目は、はっとするほど生き生きとしていた。

「いいえ、気づいていません。でも最後には、言いつもりです。」

「そうだな……。混乱するから、少なくとも今はまだ話すべきじ

やない。私でも混乱しそうだ。」

「まあ、人間そっくりですからね。自分でもびっくりです。」

でも人間には決してなれない。

「一つだけ言っておきたいことがある。」

「はい？」

「ありがとう。」

ツーンと胸に何か刺さった気がして思わず確認するけれどやっぱり何もなくていまの気持ちはインストールされてないなあ、とか思った。

照れ隠しか、すぐ窓の方へ向き直り、

「一刻も早く修理屋を探さないとな……」

とまじめに言う。

「私達はそのことを聞きにも来たんです。思い当たる人、誰かいま

「せんか？」

「思い当たる人って言われても・・・」

「あなたの一族は特定の時期に自我が宿るマシンと出会っているんです。あなたがその時期だった頃、そしてあの子がマシンと出会った時、なにか共通点か共通の人物、心当たりありませんか？」  
うーん・・・と広大な部屋を歩き回る。

「これは・・・決して他言してはいけないことなんだが、儀式、が関係するかもしれない」

「それしかないと思います。詳しく教えてください。」

つづく

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9898n/>

---

僕のマシン

2010年10月29日13時20分発行